

Eureka VI

六年制通信 No. 4 平成30年4月28日(土)号

学校の成績

財務大臣の麻生太郎さんが面白いことを言っていました。リーダーの条件について語っているのですが、リーダーは魅力がないといけないとか、無能ではダメだが、かといって何でも一人でできてしまうと周りが助けようという気にならないからいけないとか、そんな話のあとで、学校の勉強ができる人と仕事ができる人はどう違うかという話になったのですね。麻生さんの答えは次の通り。学校の勉強ができる、つまり成績がいいとは試験ができるということで、試験の特徴は「必ず模範解答がある」ということだ。しかし実際の仕事では、何が正しいのかわからない場面で最善の判断をしなくてはならないことの方が多い。ここが最も違う点で、いい点数を取れるように試験の答案を書くといった頭の使い方では通用しない。だいたいこんなことを言っていましたね。私もそう思います。つけ加えるなら、試験で及第点を取るための工夫としては、簡単な問題からクリアしていくというのがありますが、仕事は逆です。難しいものから先に解決していかないとはいけません。また、試験は制限時間があります。家に持ち帰って **better** な答案を書くことができません。ですから、どんな答案であれ、ほんの1, 2時間以内に考えたにすぎないわけです。いい答案といっても、所詮その程度の物に過ぎません。このことは、私たちはよく知っておく必要があると思います。また、割と見落とされがちなのですが、試験の大きな特徴に「答案作成は独りで」というのがあります。自分の頭の中だけで完結しています。社会に出れば、チームで仕事することが多いわけですが、答案作成に秀でていることとチームプレーが上手なこととは別物でしょうね。さらに、私たちは試験の点数のつけ方も理解しておく必要があると思います。試験には基本的に加点がありません。5点問題は、どんなに優れた解答でも6点以上はつきません。減点もそうです。5点問題を空欄にしたからといって-3点、つまり8点引くなどということはありません。実際の試験では、×を打つ時に「惜しいなあ」と思いながら打つ時もあるし、「これは、致命的なミスだ。全く理解していない。この一問だけで答案を0点にしてもいい」というような場面もあります。このミスをする人が、こっちの四択問題で正解できるわけがない、だからこれは偶然○になっただけだと、明確にわかる場合もあります。しかし、そんなときでも必要以上の減点はしません。つまり、試験は点数だけではなかなか本当の学力はわからないものなのです。採点者にはよくわかりますけどね。

ただし、この種の試験というのは高校までのことです。大学では「模範解答のない」試験もあれば、提出期限が2ヶ月先といったレポート試験などもあります。諸君も早

く大学で本当に深く勉強したい学問に出会えるといいですね。勉強したいことを勉強する、すなわち study する人を student というのですから。君たちの学力が本当に養われるのは、まだまだこれからなのですよ。

ですから、俗にいう「学歴」なるものを（これを非常に気にする大人がいることも知っていますが）「どこを卒業したか」ではなくて「何をどのように、どのくらい深く学んできたかという歴史」というように解釈するといいですね。そうすると、その歴史は大学を出た後も続くわけですから、勉強を続けている人が本当の学歴を持った人だと言えるのではないのでしょうか。こういった意味で「学歴の高い人」は、何だか職人さんのような感じがします。今日よりも明日、もっといいものを作ろうと努力を続ける職人さんたちは、今日知らなかったことを明日は理解できるようになろうと努力を続ける姿勢と似ていると思うからです。ともに、辛抱強く学ぶ心がありますものね。

最近では産学連携とあって、大学は社会に出てすぐに役立つ人材を育てるべきだ、それ以外のことは無駄ではないかといった議論もあります。しかし、私はそうは思いません。大学の使命は、若者の学びたいという好奇心に応えることです。その勉強がすぐに役に立たなくてもいい、私はそう考えています。

ですから君たちは、学校の成績というものの本質を理解したうえで、直近の成績に一喜一憂せず、心静かに、情熱を傾けて勉強できる対象を見つけて下さい。

今週のおすすめ

・荻原 浩 『お母さまのロシアのスープ』

日本推理作家協会賞の短編部門でノミネートされたことのある作品です。所蔵されているのは『押入れのちよ』（新潮文庫）と『仕掛けられた罪』（講談社文庫）ですが私は『押入れのちよ』をおすすめします。

荻原さんが何度もノミネートされながら直木賞を取れなかったことは、長らく文壇の七不思議と言われていましたが、2年前に『海の見える理髪店』で念願の受賞となりましたね。荻原さんらしい短編集ですから、これも読んでみて下さい。

『お母さまのロシアのスープ』は、導入を読むとメルヘンなのかと思うのですが、最後の最後に悲しいホラーだとわかる仕組みになっています。伏線も、当たり前ですが、上手に張られています。ちょっと好き嫌いがあるかもしれませんが、この作品以外にも荻原さんには多くの秀作がありますから、ぜひ自分のお気に入りを見つけて下さい。『明日の記憶』や『愛しの座敷わらし』は映画になっていますから観た人もいるんじゃないかな。この2冊もおすすめです。

今年のGWは長くなります。おかげでじっくり読書ができそうですね。以前から言っているように、一人の作家に集中して読んでみるのもいいと思います。荻原さんなんか、読書の楽しさを教えてくれそうですね。できれば『オロロ畑でつかまえて』からスタートし、出版された順番で読んでいくことをおすすめします。ちなみに、最新作の『逢魔が時に会いましょう』も、いつもの荻原ワールドでしたよ。

BGMはユーミンの グッドラック・アンド・グッバイ でした…。